

# さけ・ます増殖効率化推進事業調査—抄録—

※田村 亘・※※三戸芳典

## 発表誌名

平成3年度さけ・ます増殖効率化推進事業調査報告書・平成4年1月・青森県

## 抄録

### 1. 年齢組成等調査

沿岸回帰したさけ親魚の海域別の回帰生態を明らかにするため、太平洋側の白糠、津軽海峡側の大畑、日本海側の大戸瀬漁協で採鱗を行ない、年齢組成を把握した。

今年度の回帰親魚の主体は例年同様4年魚で、続いて5年魚、3年魚の順となっていた。また、海域別では太平洋側の白糠で4年魚が38.6%、5年魚が29.1%、3年魚が23.9%となっていた。津軽海峡側の大畑では4年魚が49.2%、5年魚が27.7%、3年魚が14.8%となっていた。日本海側の大戸瀬では4年魚が43.0%、5年魚が27.2%、3年魚が22.5%となっていた。

### 2. 成熟度調査

沿岸に回帰したさけ親魚について成熟度の特性を把握するため、地区別、時期別に外観的成熟度調査を行なった。

白糠、大畑、大口瀬におけるギン毛の年次別構成比の推移を見ると、白糠では昭和59年76.2%あったギンの構成比は年々減少し、今年6.9%となっていた。大畑では昭和61年に53.7%あったギンの構成比は、今年29.7%であった。大口瀬では昭和63年以降10%で推移し、今年8.1%であった。

### 3. 放流適期調査

- ① 平成3年2月27日日本県太平洋側の新井田川さけ・ますふ化場から、標識として尾鰭上部をカットした全長平均57mmのさけ稚魚23万尾を放流した。
- ② 稚魚の追跡調査は河川では曳網、沿岸域では夜間灯火使用のイカナゴ捧受網とタモ網による採捕を試みた。
- ③ 河川調査では、全長50mm以上の稚魚の採捕が少なく、このことからその大きさ（移行サイズ）に達した順に沿岸（港内）へ移行するものと推察された。
- ④ 沿岸域調査では、放流河川期を境に河口より南東側での稚魚の蜻集が多く、全長は50～80mmが主体であったが130mm台の大型稚魚も採捕された。

---

◇ ————— ◇

※：現青森県鮭ヶ沢地方水産業改良普及所勤務

※※：現水産課勤務